

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-06-01

## ソーシャルスキルおよび相互作用対象者の性別が初対面場面での対人行動に及ぼす影響

渡辺, 弥生 / TANIMURA, Keisuke / WATANABE, Yayoi / 谷村, 圭介

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

72

(開始ページ / Start Page)

187

(終了ページ / End Page)

201

(発行年 / Year)

2016-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012768>

# ソーシャルスキルおよび相互作用対象者の 性別が初対面場面での対人行動に及ぼす影響

渡辺 弥生・谷村 圭介

## 要 旨

本研究は、ソーシャルスキルの自己認知と他者評定との関係、自己の印象とソーシャルスキルとの関連、ソーシャルスキルの自己認知と実際の行動との違いを明らかにすることを目的とした。その際、実験協力者を男女1名ずつ設定し、性差の影響について焦点を当てて検討した。56名の大学生が、ソーシャルスキル高群と低群の2群に分けられた。研究対象者は、実験室で初対面の人物（実験協力者）と対面し、関係継続を予期できるよう、共同作業場面が与えられた。やりとりの内容は、ワンウェイミラーを通して観察された。その結果、女性において、同性の相互作用者である場合と、男性において異性の相互作用者の場合において、社会的行動の違いがみられた。ソーシャルスキルの高い女性は相手が同性であると開示を多く行い、相手が異性であると応答的な態度を示すことが明らかとなった。さらに、印象評定においてはソーシャルスキルの高い男性は同性に対する方が異性に対してよりも良い印象を与えられたと予測していた。このことから、性別が、初対面場面に影響力の高い要因の一つであると考察された。

キーワード：ソーシャルスキル，ジェンダー，対人行動，大学生

## 問 題

現代青年の対人関係が希薄化していることが指摘されて（落合・佐藤，1996；岡田，1995），久しい。適応的な関係を築き，維持していくためには，意図的な努力が必要であると論じられている（大坊，2003）。このような対人関係の希薄化やコミュニケーション不全の問題は，対人関係を円滑にすすめる能力であるソーシャルスキルが欠如していると考えられる（橋本，2000；渡辺，2011）。青年期は近い将来，社会に出て行く発達時期にあることから，価値観や生活スタイルが多様化する現代社会では，協調的でしかも適切な自己表現を行える高度な社会性を身につけるべきであると考えられている（佐藤・金山，2006）。特に，大学

は社会人になる前の最後の教育機関であり，大学に在籍している間に，社会人として自立していくために必要なソーシャルスキルを高めていく必要がある（島本・石井，2006）。

ソーシャルスキルの定義については，「他者によって正または負の強化を受ける行動を発現させ，罰せられたり圧倒されたりするような行動を押さえる複雑な能力」（Libet & Lewinsohn，1973）のような能力面を強調した定義や，「相互作用する人の目標を実現するのに効果がある社会的行動」（Argyle，1981）のような行動面を強調した定義などがあり，統一されていなかった。そのため，相川（1996）はソーシャルスキルの定義を概観し，ソーシャルスキルの能力面及び行動面も含んだ一連の過程として捉え直し，「対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的，

非言語的な対人行動と、そのような対人行動の発現を可能にする認知過程との両方を含む概念」と定義している。本研究ではこの定義に従って、ソーシャルスキルを捉えることとする。

これまで、ソーシャルスキルを測定する方法は、方法の簡便さから自己評定による測定が大半であった(橋本, 2000; 堀毛, 1994; 石井, 2006; 久木山, 2005a; 2005b など)。自己評定によるソーシャルスキルの測定は、ソーシャルスキルに関する個人の主観的な知識、感情、認知傾向を調べることが可能である。しかし、実際の行動と一致しているかどうかは十分に確認されないことが指摘されている(相川, 2000a)。また、渡辺(1996)は、自己評定と実際の行動との間にズレがある可能性があり、社会的な望ましさ、反応の構え、無関心など、態度によって大きく左右される可能性があるとして指摘している。

一方、実際の行動面を測定した実験的研究は、ソーシャルスキルが不足している者の行動特徴として以下のことが明らかにされている。Jones, Hobbs, & Hockenbuery (1982) は、「相手のことに関する言及が少ない」、「話題の持続性がない」、「質問しない」ことを報告している。また、相川・佐藤・佐藤・高山(1993)は、「自らの経験の開示や意見表明が少ない」、「会話へ積極的に参加しない」、「相手の陳述に対するコメントや反応をしない」、「相手への同意表現、質問を相手に返す程度が低い」、「対人的相互作用後の自分のことも相手のことも否定的に認知している傾向にある」といった行動的特徴を見出している。ソーシャルスキルは、定義からも対人場面における対人行動として発揮されるべきものであることを考慮すると、自己評定されたソーシャルスキルだけではなく、実際の行動との関係を明らかにする必要があると考えられる(藤田・田沼・相川, 2000)。しかし、以上のような指摘があるにもかかわらず、これまでの研究は自己評定に依存した研究が多く、実際の行動や行動後の対人反応の客観的な測定との関連について検討されてこなかった。他方、実験研究においては、行動面の特徴を挙げるにとどまり、

自己評定との関連については検討してこなかった。そこで、谷村・渡辺(2008)は、自己評定及び実験的方法を実施することによって、自己評定と実際の行動表出がどのように関連しているかを検討し、かなり高い一貫性があることを明らかにしている。

実験場面におけるソーシャルスキルの表出については、発話の内容と印象形成の2点から考えられる。ソーシャルスキルを検討した実験研究には、相川・佐藤・佐藤・高山(1993)の研究がある。ここでは、孤独感の高い大学生を対象に会話時のソーシャルスキルの特徴を明らかにするために、他者評定による行動観察を行っている。質的側面については、非言語的行動や自己表現、会話維持に関するスキルを声の大きさや姿勢の向きなどにカテゴライズしている。量的側面については、代表的な非言語行動(視線、発話、沈黙、微笑、うなずき)の頻度と持続時間を測定している。しかし、個人がどのような話をするのかという内容の観点からソーシャルスキルについて検討されていなかった。また、ソーシャルスキルの行動表出として、印象形成の側面からも検討しようと考えられる。Asch(1946)の研究以来、さまざまな印象形成の研究がなされてきているが、ソーシャルスキルの観点からは取り上げられてこなかった。小川(2000)は、対人関係の発展過程を考える際、初対面の相手に対する認知が重要になり、対人関係を円滑に進めていくためには、相手がどのような人物であるかを理解する必要がある、初対面場面の会話を通して形成される印象に着目している。ソーシャルスキルが、対人関係を円滑に進めていくための行動レパートリー(相川・佐藤・佐藤・高山, 1993)であることを考えると、ソーシャルスキルと初対面場面での印象形成との関係を検討することが必要であると考えられる。木村・磯・大坊(2004)は、ソーシャルスキルの高い者は低い者に比べて、相手に多く視線を向けて情報収集を行っており、自己接触を控えることで相手に神経質な印象を与えないように印象管理を行っていたことを明らかにしている。印象管理はソーシャ

ルスキルの一部として位置づけることができるという指摘もある(相川, 2000a)。このことから、ソーシャルスキルの程度によって、相手に対して自分の印象をどのように与えることができたか、という印象形成に差が出てくることが考えられる。したがって、ソーシャルスキルの行動表出として、これまで取り上げられてこなかった発話内容や印象形成の2つを加えて、①他者評定による行動観察、②具体的な発話内容、③印象形成の3つを指標として取り上げる。

ところで、これまでの初対面場面でのソーシャルスキルに関連した対人行動の実験的研究(相川・佐藤・佐藤・高山, 1993; 田中・相川・小杉, 2002)は、状況として、条件を統制するため、初対面の場面が設定されていた。後藤・大坊(2003)は、大学生の苦手とする対人場面の特徴を検討し、相手との関係が長期的なスパンで見通されている初対面の人とのコミュニケーション場面であることを明らかにしている。また、Leary & Miller (2000) や谷口(2001)によると、関係継続の予期がある場合は、その後の関係への影響が考慮されることから、印象管理や親密化のための動機づけが高まり、コミュニケーション行動が増加する。したがって、関係継続が予期される場面では、よりソーシャルスキルを表出する必要があると考えられ、ソーシャルスキルへの影響がみられることを示唆している。ただし、木村・磯・大坊(2004)は、大学生を対象に関係継続の予期とソーシャルスキルの程度が対人コミュニケーションに及ぼす影響について検討しているが、ここでは、関係継続の予期がないと認知されたときに、ソーシャルスキルが高い者ほど、会話相手に積極的に話しかけていたことを明らかにしている。すなわち、関係継続の予期の有無について、いずれの場合にソーシャルスキルへの影響がみられるかについては統一した結果が得られていないのが現状である。しかし、青年期においては、友人関係を開始したり、維持したりするためのソーシャルスキルを習得することは重要な課題であり(Jarvinen & Nicholls, 1996)、この課題を乗り

越えるためには、関係継続が望まれる際にソーシャルスキルを発揮されなければならないと考えられる。大学生が長期的な関係に対する苦手意識を持っている点を考慮し、関係継続が予期される場面でどのようにソーシャルスキルを発揮するのかを明らかにする必要がある。特に、関係を開始する際にどういった対人行動をするのかを検討する必要があると考えられる。

谷村・渡辺(2008)は、先に指摘した課題を解決するべく、大学生が苦手とする初対面場面での対人行動とソーシャルスキルとの関連性を検討した。その結果、ソーシャルスキルの自己認知は他者評定とかなり一貫していることがわかった。つまり、ソーシャルスキルの高い者は初対面場面において、質問などをすることによって会話を展開、維持する傾向にあった。さらに、相手が異性であるか同性であるかということが行動に影響を及ぼしたことが推測された。

興味深いことに、「開示」と「応答」のカテゴリにおいては、ソーシャルスキルの高い男性の研究対象者と低い男性の研究対象者間には有意な差がみられなかった。この理由として、実験協力者の性別が女性であったことが影響しているのではないかと考えられる。すなわち、ソーシャルスキルが高いにもかかわらず、男性は「応答」頻度がソーシャルスキルの低い男女と同程度になった。これは、対人場面が初対面であったうえ、実験協力者が女性であったことから異性への意識や不安などの要因が絡んでいたと考えられる。さらに、研究対象者から実験協力者への印象を求めた結果、「外向的な」の項目で性別の主効果があり、男性の方が女性より実験協力者の印象を「外向的」と抱いていた。「話しやすい」の項目については、男性ではソーシャルスキルの低群の方が高群よりも「話しやすい」、女性ではソーシャルスキルの高群の方が低群よりも「話しやすい」と実験協力者に対して感じていた。これは、実験協力者の設定に大きく関連していると考えられる。実験協力者には、30秒以上沈黙が続いたら、研究対象者に対して働きかけをするように訓練していた。そ

のため、ソーシャルスキルの低い男性は、自分から働きかけることが少なく、実験協力者から働きかけをしてもらったことで、「話しやすい」と印象を抱いたと考えられる。自分から会話を始めるということに対しては、どうすればよいのかわからず困惑してしまう傾向が高いことから、相手からの働きかけに対してかなり好印象を抱くのだろう。このように、同性間と異性間で差があったことから、男性の研究対象者にとって実験協力者が女性であったことが少なからず影響していると考えられる。

したがって、本研究では、谷村・渡辺（2008）をもとに、さらに研究対象者の性と実験協力者の性のクロスの検討を目的に加えて検討することを目的とした。

## 方 法

### 1. 研究対象者の選定

自己評定によるソーシャルスキルによって、研究対象者を抽出することを目的とした。大学で心理学系の授業を受講している大学生322名。内訳は、男性134名、女性188名であった。平均年齢

は20.26歳（ $SD = 1.32$ ）であった。学年別にみると、1年生67名（男性32名、女性35名）、2年生53名（男性20名、女性33名）、3年生166名（男性60名、女性106名）、4年生36名（男22名、女性14名）であった。

「大学生の意識調査」と称して、研究1と同様に、菊池（1988）が作成したソーシャルスキル尺度（KiSS-18）18項目を使用した（TABLE 1）。回答方法は、「いつもそうだ（5点）」～「いつもそうでない（1点）」の5段階評定で、合計得点が高いほどソーシャルスキルが高いことを示す。また、実験に協力できる人には氏名、電話番号、メールアドレスの記入を求めた。質問紙は、授業中に一斉に配布、または個別に配布し、その場にて回収した。所要時間は10分程度であった。

ソーシャルスキル尺度の回答結果より、各回答者のソーシャルスキル得点を算出した。記述統計の結果、平均値は57.28点、中央値は57点、標準偏差は10.56、最小値は18点から最大値は90点であった。正規分布を確認した後、平均値を境にしてソーシャルスキルの自己評価高群（58点以上）と低群（57点以下）に分類した。その結果、ソーシャルスキル高群は158名（男性69名、

TABLE 1 ソーシャルスキル尺度（KiSS-18）18項目（菊池，1988）

- 
- 1 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。
  - 2 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。
  - 3 他人を助けることを、上手にやれますか。
  - 4 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。
  - 5 知らない人とも、すぐに会話が始められますか。
  - 6 まわりの人との間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。
  - 7 こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。
  - 8 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。
  - 9 仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか。
  - 10 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。
  - 11 相手から非難されたときにも、それをうまく片づけることができますか。
  - 12 仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。
  - 13 自分の感情や気持ち、素直に表現できますか。
  - 14 あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。
  - 15 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。
  - 16 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。
  - 17 まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか。
  - 18 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。
-

女性 89 名), 低群は 164 名 (男性 65 名, 女性 99 名) 計 322 名となった。

ソーシャルスキル高・低群を分け, 得点の両極から順に実験参加への要請を電話, メールで行い, 承諾してくれた大学生, 高群 26 名 (男性 13 名, 女性 13 名), 低群 30 名 (男性 12 名, 女性 18 名) の計 56 名を研究対象者とした。

## 2. 実験協力者について

実験場面を初対面同士の場面とするため, 実験協力者 2 名を設定した (男性 1 名, 女性 1 名)。研究対象者は, 実験協力者の存在については伝えられておらず, 二人とも実験に参加していると予想される場面を設定した。実験協力者は研究対象者と同じ学年に見えるような人物を選んだ。研究対象者とは面識のない人物であった。自己紹介する際には, 先に研究対象者に自己紹介をさせ, 研究対象者の学年と合わせるように求めた。また, 相川・佐藤・佐藤・高山 (1993) を参考に, 実験協力者の影響を極力抑えるため, 実験協力者は自分から話し始めないこと, 自分のことを話さず聞き役にまわること, 引っ込み思案な性格を演じることが指示された。どの研究対象者に対しても同じ態度を統制できるように, その役を事前に練習した。会話中, 30 秒以上沈黙が続いた場合には,

研究対象者に対して, 「どうですか?」といった働きかけをするよう打ち合わせた。なお, 実験協力者には, この実験の意図や研究対象者の情報は一切教えられなかった。また, 研究対象者はランダムに配置された。

## 3. 実験場所

心理学実験室内のプレイルームで行われた。実験は, 研究対象者 1 名, 実験協力者 1 名の対面形式で個別面接事態とした (FIGURE 1)。

## 4. 実験時期

10 月~12 月に行われた。

## 5. 手続き

すべての研究対象者は事前に「会話行動の実験」と告げられて実験に参加した。研究対象者と実験協力者を実験室に入出させ, まず, 初対面同士であることを確認した。そこで, 以下を教示し, 共同作業場面になるように設定した。

“これからお二人に話し合っていたきたいのですが, 私 (実験者) は現在, 他にも調査テーマがあり, 調査を進めています。その調査テーマは, 「現在の大学生において, 友人関係に携

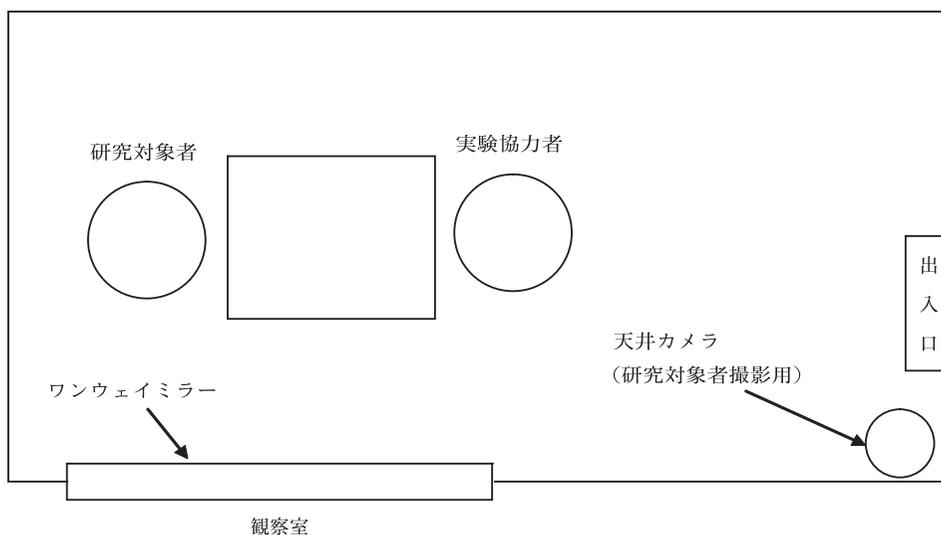


FIGURE 1 実験室の様子

帯電話が役立っているかどうか」についてです。その調査に先立ちまして、まず、現役の大学生の生の声を集めている最中なのです。お二人は現役の大学生でいらっしゃるので、ぜひご協力していただけませんか。ざっくばらんに話していただいてもかまいません。何気ないことでもかまいません。二人はペアで協力していただいて、1, 2週間後までにお二人の意見としてまとめて、私（実験者）まで教えていただきたいのです。その話し合いを今からこちらで行っていただきたいのです。”

実験者の退室と同時に観察室で録画・録音を開始し、実験を開始した。7分間の会話終了後、録画を停止してから実験者が入室し、実験中の内容を問う質問紙への記入を求めた。ただし、質問紙への記入は強制せず、協力してもらえる場合、回答してもらう旨を伝えた。研究対象者が質問紙への記入を終えた後、ディブリーフィングを行い（実験の本来の目的、相手が実験協力者であったことの伝達、研究対象者からの質問に対する応答等）、実験を終了した。所要時間は30分程度で

あった。

## 6. ソーシャルスキルの測定

心理学実験室内のプレイルームに設置してある行動観察システムにより、実験中の研究対象者の上半身画像を撮影録画・録音した。実験終了後にソーシャルスキルの行動評定について訓練された心理学専攻の大学院生2名（女性2名）によって、研究対象者のソーシャルスキルが評定された。評定者2名は独自に評定を行った。評定者間の合計評定得点の相関係数は.79 ( $p < .01$ ,  $N = 56$ )であり、高い信頼性が保証された。そこで、評定者2名の評定得点の平均を尺度得点として使用した。評定に用いた尺度は、研究1と同様に田中・相川・小杉（2002）によるものを用いた（TABLE 2）。評定はすべて6件法（「非常にそうである」～「全くそうでない」）で行い、ソーシャルスキルが高い順にそれぞれの項目において、6～1点が与えられた。なお、評定の対象となった時間は、実験時間の開始から終了までの7分間を評定対象とした。

TABLE 2 ソーシャルスキル評定尺度（田中・相川・小杉, 2002）

### A 「非言語的行動」

- ① 声の大きさ（声の大きさは適当である）
- ② ことばの明瞭さ（発音や言葉の変化が明瞭である）
- ③ ことばの速さ（適当な速さで話している）
- ④ 姿勢（適度にリラックスした姿勢である）
- ⑤ 表情（表情豊かである）
- ⑥ 身振り（適当な身振りである）
- ⑦ 視線（適度に相手を見て話している）

### B 「自己表現に関わるスキル」

- ① 素直な自己表現（自分の気持ちを素直に表している）
- ② 経験の開示（自分の経験を述べている）
- ③ 意見表明（自分の言い分や考えを表している）

### C 「会話維持に関わるスキル」

- ① 会話への積極的参加（積極的に会話に参加している）
- ② 質問スキル（相手に質問している）
- ③ フィードバックスキル（相手の話に対してコメントしている）
- ④ 同意表現（相手の話に対して同意表現がみられる）
- ⑤ 否定的態度（相手に対して否定的である：逆転項目）

7. 実験終了後の質問紙

(1) 研究対象者に対するもの

① 実験協力者に対する印象

研究1と同様に、磯・木村・桜木・大坊(2004)が使用した、①感じの良い—感じの悪い、②健康的な—不健康的な、③外向的な—内向的な、④まじめな—ふまじめな、⑤しっかりした—たよらない、⑥話しやすい—話しにくい、⑦話がうまい—話が下手な、の7項目で、それぞれ7件法で回答してもらった。なお、各評定項目は数値が高いほど、感じの良い、健康的な、外向的な、まじめな、しっかりした、話しやすい、話がうまいことを示している。

② 自己の印象予測

実験協力者に対する印象の質問と同様のものが用いられた。

③ 内省報告

実験中の相互作用の中で感じた感想や自分ができたこと、できなかったことを自由記述で回答してもらった。

(2) 実験協力者が回答するもの

① 研究対象者に対する印象

研究対象者が回答した実験協力者に対する印象と同様のものが用いられた。

② 内省報告

実験中の相互作用の中で研究対象者に対して感じた感想を自由記述で回答してもらった。

8. 研究対象者の発話内容のカテゴリー

研究対象者の7分間の発話を、発話カテゴリーに分類し、各カテゴリーに属する発話の出現頻度を測定した。なお、本研究での発話カテゴリーについて、小川(2000)の分類に従い、「情報」を除いた「開示」「質問」「応答」に分類した。これは、実験中に会話する内容が授業におけるペアワークを想定していたため、「情報」がほとんど確認されなかったためである。なお、各カテゴリーの定義は以下の通りである。「開示」：内面的情報、考え、意図の表明、「質問」：情報・方向付けの要求、「応答」：相手のコミュニケーションを受け取ったことの伝達、相づち、挨拶であった。

結 果

1. ソーシャルスキルの自己評価と他者評価の関係

TABLE 3は、他者評定によるソーシャルスキル評定得点の各条件の平均と標準偏差を示したものである。他者評定によるソーシャルスキル得点を従属変数として、「自己評定によるソーシャルスキル(高, 低) × 「研究対象者の性別(男性, 女性)」 × 「相互作用者の性別(同性, 異性)」の3要因の分散分析を行った。

その結果、二次の交互作用 ( $F(1, 48) = 4.24, p < .05$ ) とソーシャルスキルの主効果が有意であった ( $F(1, 48) = 4.87, p < .05$ )。そこで、単純交互作用の検定を行った結果、女性において、

TABLE 3 各条件におけるソーシャルスキルの他者評定得点の平均と標準偏差

| ソーシャルスキル    | 高 群         |             |             |             | 低 群         |             |              |             |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--------------|-------------|
|             | 男 性         |             | 女 性         |             | 男 性         |             | 女 性          |             |
| 相互作用者       | 同性群         | 異性群         | 同性群         | 異性群         | 同性群         | 異性群         | 同性群          | 異性群         |
| N           | 7           | 6           | 7           | 6           | 8           | 4           | 7            | 11          |
| 他者評定得点      | 68.00(9.27) | 72.17(4.99) | 74.36(9.86) | 69.83(8.23) | 65.81(9.50) | 61.25(7.11) | 61.27(13.23) | 71.18(9.34) |
| 非言語的行動      | 28.50(5.92) | 33.00(3.16) | 32.29(6.52) | 29.67(5.36) | 28.38(5.23) | 26.50(4.78) | 27.64( 5.00) | 30.73(5.70) |
| 自己表現に関わるスキル | 15.93(1.47) | 15.25(1.58) | 16.21(1.03) | 15.92(1.21) | 15.31(2.42) | 12.75(2.49) | 12.79( 2.83) | 16.59(0.82) |
| 会話維持に関わるスキル | 23.57(3.06) | 23.92(2.37) | 25.86(2.90) | 24.25(3.69) | 22.13(2.92) | 22.00(3.08) | 20.86( 6.32) | 23.86(3.52) |

ソーシャルスキルと相互作用者の性別の単純交互作用が有意傾向であった ( $F(1, 48) = 3.29, p < .10$ )。ここで、単純主効果の検定の結果、研究対象者が女性で同性の相互作用者において、ソーシャルスキルの主効果が有意であり ( $F(1, 48) = 5.40, p < .05$ )、男性の研究対象者で異性の相互作用者において、ソーシャルスキルの主効果が有意傾向がみられた ( $F(1, 48) = 3.77, p < .10$ )。すなわち、女性においては同性の相互作用者であると、男性においては異性の相互作用者であると、ソーシャルスキル高群の方が低群よりスキルフルな行動をしていたことが明らかとなった。

また、ソーシャルスキル低群において、研究対象者の性別と相互作用者の性別の単純交互作用が有意傾向であった ( $F(1, 48) = 3.30, p < .10$ )。ここで、単純・単純主効果の検定の結果、ソーシャルスキル低群で異性の相互作用者において、性別の主効果に有意傾向がみられた ( $F(1, 48) = 3.12, p < .10$ )。そして、ソーシャルスキル低群で女性において、相互作用者の性別の主効果に有意傾向がみられた ( $F(1, 48) = 3.10, p < .10$ )。すなわち、ソーシャルスキル低群で異性の相互作用者においては、女性の方がスキルフルな行動を、ソーシャルスキル低群で女性において、相手が同性より異性である方がスキルフルな行動をとっていたことが明らかとなった。

また、スキルの側面別に分散分析を行ったところ、「非言語的行動」では、二次の交互作用が有意傾向であった ( $F(1, 48) = 3.53, p < .10$ )。そこで、単純交互作用の検定の検定を行ったところ、単純交互作用はみられなかった。

「自己表現に関わるスキル」では、二次の交互作用が有意であった ( $F(1, 48) = 7.73, p < .01$ )。そこで、単純交互作用の検定を行ったところ、相互作用者が同性のとき、ソーシャルスキルと研究対象者の性別の交互作用に有意傾向 ( $F(1, 48) = 3.41, p < .10$ )、相互作用者が異性のときに、ソーシャルスキルと研究対象者の性別の交互作用が有意であった ( $F(1, 48) = 4.35, p < .05$ )。そして、女性において、ソーシャルスキルと相互作用

者の性別の交互作用が有意であった ( $F(1, 48) = 7.26, p < .01$ )。ソーシャルスキル低群において、研究対象者の性別と相互作用者の性別の交互作用が有意であった ( $F(1, 48) = 17.49, p < .01$ )。ここで、単純・単純主効果の検定を行った結果、男性で相互作用者が異性の条件 ( $F(1, 48) = 5.39, p < .05$ )、女性で相互作用者が同性の条件 ( $F(1, 48) = 10.14, p < .01$ )において、ソーシャルスキルの主効果がみられた。したがって、男性は相手が異性であるとソーシャルスキル高群の方が低群より自己表現を行い、女性は相手が同性であるとソーシャルスキル高群の方が低群より自己表現を行っていたことが明らかとなった。また、ソーシャルスキル低群で相互作用者が同性、異性において研究対象者の性別の影響がみられた (それぞれ、 $F(1, 48) = 5.51, p < .05, p < .05, F(1, 48) = 12.73, p < .01$ )。すなわち、ソーシャルスキル低群において、相手が同性であると男性の方が女性より自己表現を行っており、相手が異性であると、女性の方が男性より自己表現を行っていたことが明らかとなった。

「会話維持に関わるスキル」では、「自己評定によるソーシャルスキル」の主効果が有意傾向であった ( $F(1, 48) = 3.93, p < .10$ )。すなわち、ソーシャルスキル高群の方が低群より会話維持に関わるスキルを発揮していたということが明らかとなった。

## 2. ビデオ分析：研究対象者の発話内容

心理学を専攻する大学院生と筆者2名 (男性1名、女性1名) により、実験参加者の発話内容の分類を行った。観察の信頼性を確認するため、研究対象者の発話内容のカテゴリー分けについて、コーエンの  $\kappa$  係数を算出したところ、 $\kappa = .89$  であった。得られたデータは十分に信頼できるものであると考えられた。

TABLE 4 は、研究対象者の発話内容を「開示」「質問」「応答」の三つのカテゴリーに分け、その頻度の平均を示している。「ソーシャルスキル (高、低)」×「研究対象者の性別 (男性、女性)」

TABLE 4 発話内容「開示」「質問」「応答」それぞれの頻度の平均と標準偏差

| ソーシャルスキル | 高 群         |             |             |             | 低 群         |             |             |             |
|----------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
|          | 男 性         |             | 女 性         |             | 男 性         |             | 女 性         |             |
| 研究対象者    |             |             |             |             |             |             |             |             |
| 相互作用者    | 同性群         | 異性群         | 同性群         | 異性群         | 同性群         | 異性群         | 同性群         | 異性群         |
| <i>n</i> | 7           | 6           | 7           | 6           | 8           | 4           | 7           | 11          |
| 開 示      | 14.14(5.00) | 15.00(4.73) | 15.43(3.85) | 12.00(2.00) | 12.86(3.79) | 10.75(2.39) | 10.14(2.78) | 12.55(3.29) |
| 質 問      | 15.00(7.64) | 17.33(5.79) | 18.43(6.72) | 14.50(4.96) | 12.50(6.23) | 15.75(3.96) | 15.14(7.51) | 12.09(4.48) |
| 応 答      | 16.00(4.99) | 16.50(7.25) | 15.57(5.26) | 18.50(4.53) | 15.50(7.21) | 13.25(5.12) | 11.57(2.32) | 18.36(6.19) |

×「相互作用者の性別（同性，異性）」の3要因の分散分析を行った。

その結果、「開示」では、二次の交互作用が有意であった ( $F(1, 48) = 4.06, p < .05$ )。そこで、単純交互作用の検定を行った結果、女性の研究対象者において、ソーシャルスキルと相互作用者の性別の単純交互作用が有意傾向であった ( $F(1, 48) = 3.56, p < .10$ )。ここで、単純・単純主効果の検定を行ったところ、研究対象者が女性で相互作用者が同性条件において、ソーシャルスキルの主効果が有意であった ( $F(1, 48) = 5.84, p < .05$ )。すなわち、女性は同性の相互作用者において、ソーシャルスキル高群の方が低群より「開示」をしていたことが明らかとなった。

「質問」では、研究対象者の性別×相互作用者の性の交互作用に有意傾向がみられた ( $F(1, 48) = 2.99, p < .10$ )。そこで、単純主効果の検討を行った結果、いずれの水準において、有意差はみられなかった。

「応答」では、研究対象者の性別×相互作用者の性別の交互作用に有意傾向がみられた ( $F(1, 48) = 2.88, p < .10$ )。そこで、各要因の水準別に単純効果を分析した結果、女性において、相互作用者の性に効果がみられた ( $F(1, 48) = 4.14, p < .05$ )。したがって、女性は相互作用者が同性より異性の方が「応答」する頻度が多くなることが明らかとなった (FIGURE 2)。

### 3. 実験協力者に対する印象評定

TABLE 5は、実験協力者に対する印象評定値の平均と標準偏差である。快印象値（合計値）と各7項目について、「ソーシャルスキル（高，低）」

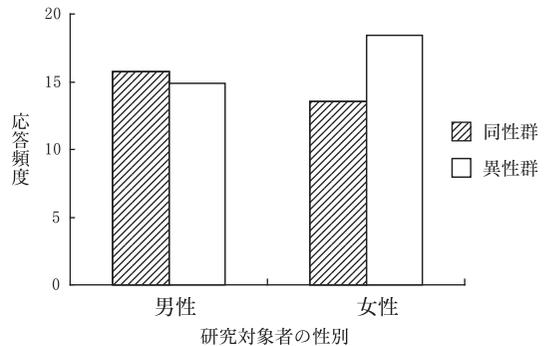


FIGURE 2 「応答」における研究対象者の性別×相互作用者の性別の交互作用

×「研究対象者の性別（男性，女性）」×「相互作用者の性別（同性，異性）」の3要因の分散分析を行った。その結果、「快印象」 ( $F(1, 48) = 4.18, p < .05$ )，「健康的な—不健康的な」 ( $F(1, 48) = 3.48, p < .10$ )，「外向的な—内向的な」 ( $F(1, 48) = 14.16, p < .01$ )，「しっかりした—たよりない」 ( $F(1, 48) = 2.82, p < .10$ )，「話しやすい—話しにくい」 ( $F(1, 48) = 6.32, p < .05$ )。「話がうまい—話が下手な」 ( $F(1, 48) = 22.23, p < .01$ )において、研究対象者の性別と相互作用者の性別の交互作用がみられた。

そこで、単純・単純主効果の検定を行ったところ、「快印象」「話しやすい—話しにくい」において、同性において、性別の効果が有意傾向がみられた（それぞれ、 $F(1, 48) = 3.04, p < .10, F(1, 48) = 3.88, p < .10$ ）。相手が同性であると、男性の方が女性より良い印象をもち、話しやすく感じていることが明らかとなった。また、男性において、相互作用者の性別の効果がみられた（それぞれ、 $F(1, 48) = 6.23, p < .05, F(1, 48) = 5.15, p < .05$ ）。男性において、相手が同性である方が

TABLE 5 実験協力者に対する印象評定の平均値と標準偏差

| ソーシャルスキル         | 高群          |             |             |             | 低群          |             |             |             |
|------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
|                  | 男性          |             | 女性          |             | 男性          |             | 女性          |             |
| 相互作用者            | 同性群         | 異性群         | 同性群         | 異性群         | 同性群         | 異性群         | 同性群         | 異性群         |
| 快印象値             | 28.88(4.55) | 25.67(6.16) | 26.86(3.56) | 28.00(2.00) | 30.25(2.90) | 24.50(3.78) | 26.00(4.34) | 26.27(4.88) |
| 感じのよい—<br>感じの悪い  | 5.43(0.90)  | 4.50(1.12)  | 4.86(0.99)  | 5.00(1.00)  | 5.50(0.87)  | 4.75(0.43)  | 4.57(1.68)  | 4.73(1.05)  |
| 健康的な—<br>不健康な    | 3.71(1.16)  | 4.33(1.37)  | 4.39(1.03)  | 3.67(0.75)  | 4.50(1.12)  | 4.50(0.87)  | 4.86(1.36)  | 3.64(0.98)  |
| 外向的な—<br>内向的な    | 3.29(1.28)  | 2.17(1.07)  | 2.57(0.50)  | 3.00(0.58)  | 3.75(1.48)  | 2.00(0.71)  | 2.00(0.93)  | 3.27(0.96)  |
| まじめな—<br>ふまじめな   | 6.14(0.64)  | 6.17(0.69)  | 6.00(0.76)  | 6.17(0.37)  | 6.13(0.60)  | 6.00(0.00)  | 6.29(0.70)  | 5.55(0.89)  |
| しっかりした—<br>たよりない | 5.29(1.03)  | 4.50(1.50)  | 4.86(1.46)  | 5.17(0.69)  | 5.50(1.12)  | 5.00(0.71)  | 4.14(1.73)  | 5.00(1.04)  |
| 話しやすい—<br>話しにくい  | 4.29(1.58)  | 3.67(1.80)  | 3.57(0.90)  | 4.17(0.90)  | 4.38(0.86)  | 2.75(1.09)  | 3.14(0.64)  | 3.82(1.19)  |
| 話がうまい—<br>話が下手な  | 4.39(1.39)  | 2.83(0.69)  | 3.13(0.35)  | 3.83(0.69)  | 4.25(0.97)  | 2.25(1.09)  | 2.43(0.73)  | 3.55(1.08)  |

良い印象を持ち、話しやすく感じていることが示唆された。

「健康的な—不健康な」では、女性において相互作用者の性別の効果が有意傾向がみられた ( $F(1, 48) = 3.90, p < .10$ )。すなわち、女性は、相手が異性よりも同性の方が健康的であると感じていたことが明らかとなった。

「外向的な—内向的な」「話がうまい—話が下手な」では、同性（それぞれ、 $F(1, 48) = 8.24, p < .01, F(1, 48) = 14.12, p < .01$ ）、異性（それぞれ、 $F(1, 48) = 6.02, p < .05, F(1, 48) = 8.47, p < .01$ ）において、研究対象者の性別の効果がみられた。相手が同性であると、男性の方が女性より外向的で、話がうまいと感じ、相手が異性であると、女性の方が男性より外向的で、話がうまいと感じていることが示唆された。また、男性（それぞれ、 $F(1, 48) = 11.16, p < .01, F(1, 48) = 19.16, p < .01$ ）、女性（それぞれ、 $F(1, 48) = 3.93, p < .10, F(1, 48) = 5.25, p < .05$ ）において、相互作用者の性別の効果がみられた。男性は異性より同性の相手に対して、外向的で話がうまいと感じており、女性は同性より異性の相手に対して、外向的で話がうまいと感じていることが明らかとなった。

「しっかりした—たよりない」では、同性の相

手において研究対象者の性別の効果がみられた ( $F(1, 48) = 2.99, p < .10$ )。すなわち、相手が高群条件であると、男性の方が女性よりしっかりしていると印象を受けていたことが示された。

#### 4. 自己の印象評定

快印象値と各7項目ごとに、「ソーシャルスキル（高、低）」×「研究対象者の性別（男性、女性）」×「相互作用者の性別（同性、異性）」の3要因の分散分析を行った。その結果、「快印象値」( $F(1, 48) = 4.24, p < .05$ )、「話がうまい—話が下手な」( $F(1, 48) = 3.03, p < .10$ )において、研究対象者の性別の主効果がみられた。男性の方が女性より、良い印象を与え、話がうまいという印象を与えただろうと予測していることが示された。「話しやすい—話しにくい」では、ソーシャルスキルの主効果 ( $F(1, 48) = 2.99, p < .10$ )、研究対象者の性別の主効果 ( $F(1, 48) = 4.24, p < .05$ ) がみられた。ソーシャルスキル高群の者と、女性より男性の方が相手に話しやすい印象を与えていると自負していることが明らかとなった。

「感じの良い—感じの悪い」において、研究対象者の性別と相互作用者の性別の交互作用が有意傾向であった ( $F(1, 48) = 3.77, p < .10$ )。そこで、単純主効果を検定した結果、異性条件におい

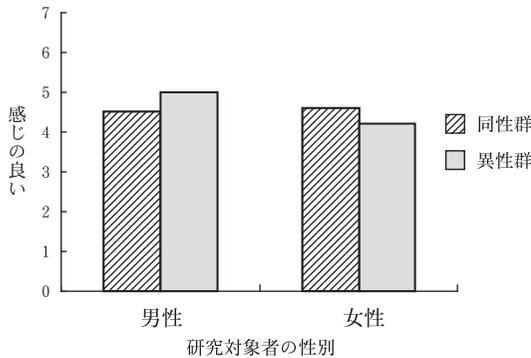


FIGURE 3 「感じのよい—感じの悪い」の研究対象者の性別×相互作用者の性別の交互作用

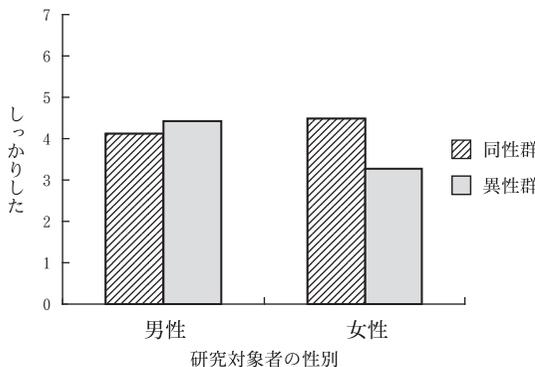


FIGURE 4 「しっかりした—たよりない」の研究対象者の性別×相互作用者の性別の交互作用

て研究対象者の性別の効果がみられた ( $F(1, 48) = 5.87, p < .05$ )。すなわち、相手が異性であると、女性より男性の方が感じがよいという印象を与えていると自負していることが示唆された (FIGURE 3)。「しっかりした—たよりない」においても、研究対象者の性別と相互作用者の性別の交互作用が有意であった ( $F(1, 48) = 5.70, p < .05$ )。単純主効果を検定した結果、異性条件で研究対象者の性別の効果 ( $F(1, 48) = 6.51, p < .05$ )、女性において相互作用者の性別の効果 ( $F(1, 48) = 7.48, p < .01$ )、がみられた (FIGURE 4)。相手が異性であると男性の方がしっかりしているという印象を与えているとし、女性は相手が異性よりも同性の場合の方がしっかりしていると自負していることが明らかとなった。

## 考 察

### 1. 自己評定と実際の相互作用場面におけるソーシャルスキルとの関係について

自己評定と行動観察によるソーシャルスキルの評定的一致について検討した結果、女性において、同性の相互作用者である場合と、男性において、異性の相互作用者の場合では、自己評定が高い者は、他者評定も高く、自己評定が低い者は他者評定が低くなることが明らかとなった。Carli (1990) によると、女性はためらいがちに話すという特徴が指摘されているが、これは女性同士の会話ではなく、女性と男性の会話のみで出現する。男性への影響力は主張的に話す女性よりためらいがちに話す女性の方が大きいことから、女性は会話場面の文化的・社会的コンテキストを正確に読み取り、最大限の効果を発揮できるように行動を調整していると考えられる。また、Helweg-Larsen, Cunningham, Carrico, & Pergram (2004) は、男女大学生のうなずきに関する調査を行っている。教師と学生間の会話では、学生のうなずき回数の方が教師より多く、うなずき回数に性差はないが、学生同士の会話では男子学生のうなずき回数は女子学生より少ないことが明らかにされている。これは会話相手の地位や自分の役割次第で男性もコミュニケーションのしかたが変わることを示している。こういったことから、相手の性別によって、役割が変わり、コミュニケーション方法に影響を与えたことが考えられる。

### 2. ソーシャルスキルと研究対象者の発話内容との関係について

研究対象者の発話内容について、「開示」「質問」「応答」の三つのカテゴリーに分け、その発言頻度を検討した。その結果、「開示」では、女性の研究対象者は相手が同性であるとソーシャルスキルの高群の方が「開示」をする頻度が多かった。また、女性は相手が異性の方が「応答」をする頻度が多かった。このことは、先にも述べたとおり、

ソーシャルスキルの高い女性は、会話場面のコンテキストを読み取る能力が高いことが影響していると考えられる。置かれている場について、すぐに察知し、自分の求められる役割を遂行することができることが示唆される。また、男性については統計的な有意差はみられなかったが、研究対象者数が少ないという限定がある。研究1と同様に相手が異性であるか、同性であるかということが行動に影響を及ぼす可能性が残されている。今後は適切なサンプルサイズによって、議論が進むことが望まれる。

### 3. 研究対象者から実験協力者への印象について

研究対象者から実験協力者への印象を求めた結果、「快印象値」「話しやすい」において、相手が同性であると、男性は良い印象を抱き、話しやすく感じていること、異性より同性の相手に対して、話しがうまいと感じていることが明らかとなった。これは、実験協力者の設定に大きく関連していると考えられる。実験協力者は聞き役に徹することが指示されていた。男性は支配欲求が強く、発話権や順番を得て会話をコントロールし、自分の優位性や権威を高めようとするのが指摘されている (Anderson & Leaper, 1998)。話を聞いてもらえるという状況にあり、男性は自分の優位性を感じながら会話をすすることができたため、これらの印象を抱いたと考えられる。

また、女性は同性より異性に対して、話しがうまいと感じていることが示された。実験協力者は、聞き役に徹することを指示していたため、研究対象者の話を受容的に聞いてもらえる環境にあった。男性の実験協力者に対して、聞き上手な人であると認識し、話しやすさを感じたと考えられる。

### 4. 自己の印象評定

男性の方が女性より、全体的に良い印象を与え、話しがうまい、話しやすいと予測していることが示された。また、ソーシャルスキルの高い者は話しやすいという印象を与えていると自負しているこ

とが明らかとなった。研究1ではソーシャルスキルの効果がみられていたが、本研究では部分的に研究1の知見を支持されたと考えられる。ソーシャルスキルの高い者ほど、相手に多く視線を向けて情報収集をし、自己接触を控えることで神経質な印象を与えないように印象管理を行っていたという木村・磯・大坊 (2004) の知見とも一致する。

また、相手が異性であると、男性は感じが良い、しっかりしているという印象を与えていること、女性は相手が同性の場合にしっかりしているという印象を与えていると予測していることが明らかとなった。先にも述べたとおり、男性は支配欲求が強く、発話権や順番を得て会話をコントロールし、自分の優位性や権威を高めようとするのが指摘されている (Anderson & Leaper, 1998)。男性が会話をすすめていったことで、このような自己評価につながったと考えられる。

本研究は、実際に自己が認知したソーシャルスキルと実際に行動として発揮されるソーシャルスキルとの関連について検討してきた。また、性差について検討し、相手が同性か異性かによって、ソーシャルスキルの発揮に違いがみられた。これまでのソーシャルスキルに関連する実験的研究 (相川・佐藤・佐藤・高山, 1993; 田中・相川・小杉, 2002; 木村・磯・大坊, 2004) では、性差については検討されてこなかったが、より積極的に取り組み、多くの知見を蓄積していく必要がある。

本研究の問題点として、まず両研究ともに、サンプル数の少なさが挙げられる。サンプル数が少ないために、第2種の誤りを犯す可能性が大きくなる。また、検定力も弱くなってしまう。適切なサンプルサイズを考慮した上で、研究を進めるべきであることが指摘される (村井, 2006)。

また、こうした実験室実験では大きなコストがかかるので、なかなか実施するのは難しい。しかし、ソーシャルスキルは、対人場面における対人行動として発揮されるべきものである。このことを考慮すると、これまでの研究で多用されてきた自己評定によるもののみでの研究だけではなく、

実際の行動との関係を明らかにする必要があると考えられる（藤田・田沼・相川，2000）。自己の認知と実際の行動とはズレが生じる可能性が大きい。もっと積極的に対人行動を測るということが望まれる。

本研究によって，大学生が初対面でコミュニケーションがスムーズにいくためには，ソーシャルスキルを高めることが必要なことが明らかとなった。発達段階に応じた，社会的適応を援助するための有効なアプローチのひとつにソーシャルスキル・トレーニング（SST）（金山・佐藤・前田，2004）が教育分野において広まってきているが，本研究から，相手とのコミュニケーションを円滑にしていくために，「質問」が重要であることや相手に応じてコミュニケーション方略を変えることが明らかになった。今後ソーシャルスキルの低い大学生に対する効果的なプログラムを開発していくうえでこの知見は有意義に活用できるであろう。後藤・宮城・大坊（2004）は，一般的な大学生を対象とする場面では，参加者が自分自身のソーシャルスキルや対人関係のスタイルを見直すこと自体にも，認知的な効用があると予想しており，再認識という重要な機会であると指摘している。大学生間の対人関係のやりとりや仲間関係の活性化は，人格形成において，さらには，社会に適応するうえでも必要であり，大学教育においてもこうしたソーシャルスキル教育の観点が求められるように思われる。したがって，ソーシャルスキルの学習は，生涯続けなければならないものである（相川，2000a）ということからも，現在の大学生のソーシャルスキルの実態を明らかにし，教育に活用していく視点が必要であろう。

#### 謝辞

調査・実験に参加していただいた研究対象者の皆様がいらっしゃらなければ，本研究は成り立ち得ませんでした。研究対象者の皆様に深く感謝いたします。

#### 引用文献

相川 充 1996 社会的スキルという概念 相川 充・津村俊充（編）社会的スキルと対人関係：自己

表現を援助する pp.3-21. 誠信書房

相川 充 2000a セレクション社会心理学 20 人づきあいの技術——社会的スキルの心理学——サイエンス社

相川 充 2000b シャイネスの低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関するケース研究 東京学芸大学紀要第1部門, 51, 49-59.

相川 充・佐藤正二・佐藤容子・高山 巖 1993 孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究——孤独感と社会的スキルとの関係——社会心理学研究, 8(1), 44-55.

Anderson, K. J., & Leaper, C. 1998 Meta-analyses of gender effects on conversational interruption: Who, what, when, and how. *Sex Roles*, 39, 225-252.

Argyle, M. 1981 The nature of social skill. In M. Argyle (Ed), *Social Skills and Health*. Methuen. pp.1-30.

Asch, S. E. 1946 Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.

Carli, L. L. 1990 Gender, language, and influence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 941-951.

大坊郁夫 2003 社会的スキル・トレーニングの方法序説——適応的な対人関係の構築——対人社会心理学研究, 3, 1-8.

藤田正美・田沼実敏・相川 充 2001 社会的スキルの遂行不安と遂行との関係に関する研究 東京学芸大学紀要1部門, 52, 73-81.

Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershan, N. J. & Klein, P. 1986 The adolescent: Social skills training through structured learning. In G., Cartledge & Milburn, J. F. (Eds), *Teaching social skills to children*, Pergamon Press.

後藤 学・大坊郁夫 2003 大学生はどんな対人場面を苦手とし，得意とするのか？——コミュニケーション場面に関する自由記述と社会的スキルとの関連——対人社会心理学研究, 3, 57-63.

後藤 学・宮城速水・大坊郁夫 2004 社会的スキル・トレーニングの効果性に関する検討——得点変化のパターンにみる参加者クラスタリングの試み——電子情報通信学会技術研究報告, 104, 7-12.

橋本 剛 2000 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, 48, 94-102.

Havighurst, R. J. 荘司雅子（訳）1958 人間の発達と教育 牧書店 Havighurst, R. J. 1953

- Human development and education*. New York: Longmans Green.
- Helweg-Larsen, M., Cunningham, S.J., Carrico, A., & Pergram, A. M. 2004 To nod or not to nod: An observational study of nonverbal communication and status in female and male college students. *Psychology of Women Quarterly*, **28**, 358-361.
- 堀毛一也 1994 人あたりの良さ尺度 菊池章夫・堀毛一也(編著) 社会的スキルの心理学 川島書店, pp.168-176.
- 石井佑可子 2006 社会的スキル研究の現況と課題—「メタ・ソーシャルスキル」概念の構築へ向けて— 京都大学大学院教育学研究科紀要, **52**, 347-359.
- 磯友輝子・木村昌紀・桜木亜希子・大坊郁夫 2004 視線行動が印象形成に及ぼす影響—3者間会話場面における非言語的行動の果たす役割— 対人社会心理学研究, **4**, 83-91.
- Jarvinen, D. W., & Nicholls, J. G. 1996 Adolescents' social goals, beliefs, about the causes of social success, and satisfaction in peer relations. *Developmental Psychology*, **32**, 435-441.
- Jones, W. H., Hobbs, S. A., & Hockenbury, D. 1982 Loneliness and social skill deficits. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 682-689.
- 金山元春・佐藤正二・前田健一 2004 学級単位の集団社会的スキル訓練—現状と課題— カウンセリング研究, **37**, 270-279.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 菊池章夫 1994 社会的スキルの心理学 川島書店
- 木村昌紀・磯友輝子・大坊郁夫 2004 関係継続の予期が対人コミュニケーションに及ぼす影響 電子情報通信学会技術研究報告, **104**, 1-6.
- 久木山健一 2005a 青年期の社会的スキル改善意欲に関する検討 発達心理学研究, **16**(1), 59-71.
- 久木山健一 2005b 青年期の社会的スキルの生起過程に関する研究—アサーションの社会的情報処理に着目して— カウンセリング研究, **38**(3), 195-205.
- Leary, M. R. & Miller, R. S. 2000 Self-presentational perspectives on personal relationships. In S. W. Duck & W. Ickes. (Eds.), *The social psychology of personal relationships* (pp. 129-155.). Chichester, UK: Wiley.
- Libet, J. & Lewinsohn, P. 1973 The concept of social skill with special reference to the behavior of depressed persons. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **40**, 302-312.
- 村井潤一郎 2006 第5章 サンプルサイズに関する一考察 心理学の新しいかたち第3巻 心理学研究法の新しいかたち 吉田寿夫(編著) 誠信書房 pp.114-141.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友人とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 小川一美 2000 初対面場面における二者間の発話量のつりあいと会話者および会話に対する印象の関係 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **47**, 173-183.
- 岡田 努 1995 現代青年の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.
- 佐藤正二・金山元春 2006 中学校におけるソーシャルスキル教育の実践 相川 充・佐藤正二(編) 実践! ソーシャルスキル教育 中学校—対人関係能力を育てる授業の最前線— 図書文化社 8-21.
- 島本好平・石井源信 2006 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究, **54**, 211-221.
- 田中健吾・相川 充・小杉正太郎 2002 ソーシャルスキルが2者間会話場面のストレス反応に与える効果に関する実験的検討:2者間のソーシャルスキルにおける相対的差異の影響 社会心理学研究, **17**(3), 141-149.
- 谷口淳一 2001 異性に対する自己呈示方略に関する実験的研究—自己呈示ジレンマ状況に置ける魅力度と重要度の効果— 対人社会心理学研究, **1**, 93-106.
- 谷村圭介・渡辺弥生 2008 大学生におけるソーシャルスキルの自己認知と初対面場面での対人行動との関係 教育心理学研究, **56**(3), 364-375.
- 渡辺弥生 1996 講座サイコセラピー第11巻 ソーシャル・スキル・トレーニング(SST) 日本文化科学社

## Interpersonal Behaviors in Initial Encounters Based on Social Skills and Gender Interaction

Yayoi WATANABE and Keisuke TANIMURA

### Abstract

The purposes of the present study were to examine relationships between self-reports and others' evaluations of social skills, links between self-impression and social skills, and differences between cognition of social skills and social behavior. University students ( $N=56$ ) completed a social-skills questionnaire, and then were divided into 2 groups: one group with students with higher-social skills and another group with lower-social skills. Each student was taken to the experimental room, where they met a stranger (same sex stranger or opposite sex stranger). The 2 individuals were asked to cooperate in planning a presentation by the experimenter. Their conversation was observed through a one-way mirror. The results showed that social behaviors were influenced by the interaction of gender and social skills. Female students especially behaved differently towards strangers according to their sex. Female students who reported superior social skills tended to open up to female strangers more than to male ones, but their responses were often brief and limited. Moreover, the male students who reported superior social skills evaluated themselves as having given more positive impression to the male strangers than the female strangers in the initial encounter. Therefore the gender was considered to be one of the most influential factor in the initial encounter.

**Keywords:** social skills, gender, interpersonal behaviors, university students